旭川ウェルビーイング・コンソーシアム　あさひかわオープンカレッジ

日時　２０２４年7月１３日１３：３０～１５：３０
場所　フィール旭川７階　シニア大学教室
演題　医師で開拓者の“関寛斎”の足跡をとおして、近現代の北海道を考える
講師　旭川市立大学名誉教授
　　旭川ウェルビーイング・コンソーシアム 教育コーディネーター
　　竹中英泰

１．北海道への移住者たち
　　いつ
　　どのような人たちが
　　どのような理由・どのようなかたちで
　　どのような苦労を重ねて定着し、今日に至ったか？

２．関寛斎（１８７０年～１９１２年）の生涯
　　佐倉順天堂で西洋医学を学ぶ
　　銚子で開業
　　浜口梧陵との交遊
　　長崎留学　ポンペに学ぶ
　　徳島藩医　戊辰戦争で新政府の軍陣病院頭取
　　徳島で開業

３．陸別に入植（明治３５年～明治４５/大正１年）

４．徳富蘆花の陸別訪問（明治４３年９月）　徳富蘆花「みみずのたはごと」

５．関寛斎を取り上げた作家たち
　　・ 徳富蘆花「みみずのたはごと」
　　・ 司馬遼太郎「胡蝶の夢」
　　・ 城山三郎「人生余熱あり」
　　・ 高田郁「あい　永遠に在り」

〈北海道への移住者たちの諸相〉

	1870/明治3	1871/明治4	1872/明治5	1875/明治8	1878/明治11	1880/明治13	1882/明治15	1888/明治21	1889/明治22	1891/明治24～32	1893/明治26	1897/明治30	1898/明治31	1902/明治35
戊辰戦争後滅封された藩の移住	滅封された仙台藩亘理家/伊達邦成主従が、伊達の開拓に入った	滅封された仙台藩岩出山家/伊達邦直主従が当別の開拓に入った	庚午事変を受けて、徳島藩/稲田邦植は静内の開拓に入った		尾張徳川慶勝は新政府恭順を進め、八雲開拓を主導した									
屯田兵（1875/明治8～1904/明治37年、37兵村・7,337戸・39,911人）				憲兵的役割も担った士族屯田は、琴似、山鼻、江別、篠津、野幌、室蘭、根室、篠路、滝川、厚岸に入った						永山武四郎による改革を経た平民屯田が、永山・東旭川・当麻、江部乙、秩父別、一巳、野付牛、湧別、士別・剣淵に入った				
会社組織・結社の移住						鈴木清、沢茂吉らが赤心社設立、浦河に入植	依田勉三らが晩成社設立、翌年から帯広に入植	大橋一蔵・関矢孫左衛門らが、北越殖民社設立、江別に入植				二宮尊親らが興復社設立、豊頃に入植	坂本直寛らが北光社設立、北見に入植	
1886/明治19年土地払下規則・1897/30年国有未開地処分法➡華族農場など大農場									三条侯爵、蜂須賀侯爵、菊亭侯爵らが雨竜農場設立、解散後銘々の農場へ		武市安哉らが聖園農場設立し浦臼に入植。1895/明治28年、松江藩主が松平農場設立、鷹栖に入植		有島武が有島農場を設立、ニセコに入植。武郎名義に変更後の1922/大正11年解放	医師で開拓者・関寛斎が陸別に入植

関寛斎の足跡

① 千葉県東金市（1830–47）
（出生地及び養父母の地）

② 千葉県佐倉市（1848–52）
（佐倉順天堂。佐藤泰然に医学を学ぶ）

③ 千葉県銚子市（1856–60）
（初めての養生所を開く）

④ 長崎県長崎市（1860–62）
（ポンペに蘭医学を学ぶ）

⑤ 東京都文京区（1858、1868）
（コレラの集団発生、医師として現地へ）

⑥ 徳島県徳島市（1862–71、1873–1902）
（徳島藩の典医となる）（御医者）

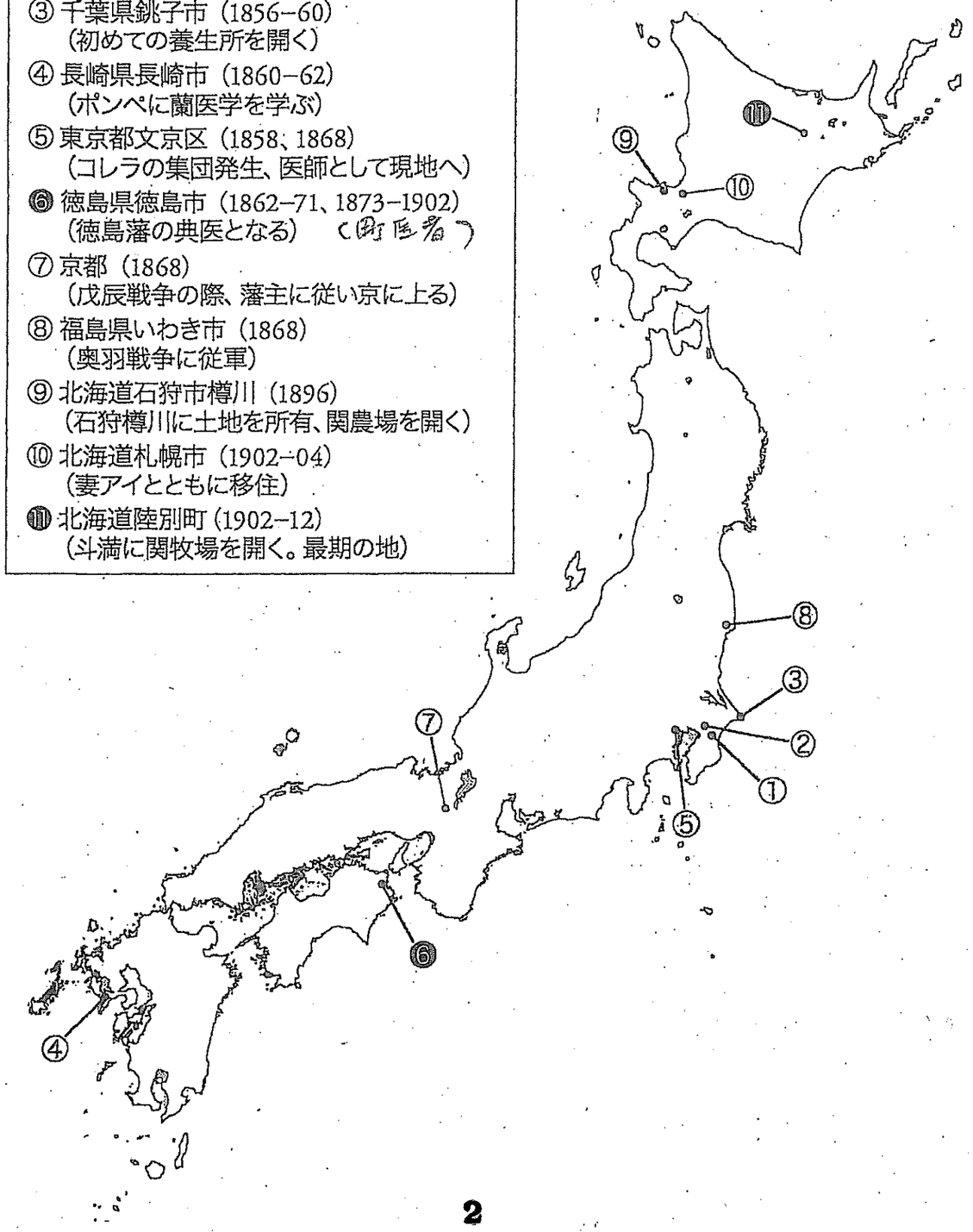
⑦ 京都（1868）
（戊辰戦争の際、藩主に従い京に上る）

⑧ 福島県いわき市（1868）
（奥羽戦争に従軍）

⑨ 北海道石狩市樽川（1896）
（石狩樽川に土地を所有、関農場を開く）

⑩ 北海道札幌市（1902–04）
（妻アイとともに移住）

⑪ 北海道陸別町（1902–12）
（斗満に関牧場を開く。最期の地）



医師で開拓者。関寛斎の足跡を辿って見えること

旭川大学名誉教授・旭川ウェルビーイング・コンソーシアム理事　竹中英泰

はじめに

北海道の開拓には、実にさまざまな人たちがさまざまな思いを持って挑んできています。何時、どういう動機で、誰と、何処から何処へ、どうやってという視点で整理すると以下のようになります。

何時は、当然明治維新直後から始まります。たとえば、戊辰戦争の敗者ということで減封された仙台藩の亘理伊達藩は、明治3／1870年に主従一体で有珠（今の伊達市）への入植を始めます。他藩にもいくつか同ケースがあります。明治8／1875年には、発足したばかりの屯田兵が琴似や山鼻に入ります。この時の屯田兵は、士族に限られかつ憲兵的な役割も担っています。本格的な内陸開拓を目指して行われた大改革（明治23／1890年）を契機に平民主体となった屯田兵は、旭川圏域の稲作化にも手広げ上川百万国への道筋をつけています。明治37／1904年の屯田兵制度廃止までに、37兵村、7337戸、約4万人が入植、家族も含めると急速な人口増をもたらしています。ただし、当初は村落の要だった兵村の周辺には、鉄道等の整備もあって後からきた商人たちを軸に大きな市街地が形成されていきます。都市化の進展に相対的に遅れる兵村は、次第に市街地に従属されていきます。

明治19／1886年の土地払下げ規則施行や明治30／1897年の北海道国有未開地処分法を受けて、大地積の農場経営の試みも始まります。ただし、流通経路等のインフラが未成熟だったこともあって規模を縮小したり農地解放に踏み切った動きも出ています。

こうしたなか、関寛斎は十勝・釧路と北見の境界域にあってなお未開拓地の陸別を目指します。蘭方医として腕を磨き、戊辰戦争時の軍陣病院の頭取を務め、30年に及ぶ徳島の町医者として実績を重ねてきた寛斎は、北海道という新天地にしかも未開地を目指した開拓者でした。「私」より「公」を思い国の生産力を上げるべく開拓に全人生をかけようと言うのです。これまで多くの作家たちが関寛斎を取り上げています。こうした作家たちの視点を整理しながら関寛斎を位置づけてみると

どんな景色が見えてくるのか、北海道開拓の諸相がより多角的に見えてくるのではないのか考えて見ます。

1. 関寛斎の略歴

関寛斎は、佐倉順天堂で西洋医学を学び、郷里での開業と結婚後に銚子に移ります。そこで浜口梧陵と知り合います。その支援もあって、長崎の海軍伝習所に開講された医学校において軍医ポンペに学びます。学ぶ傍ら診療も行っています。患者のなかには後に交友を深める徳富蘆花の両親がおりました。また、司馬凌海が翻訳し寛斎が校閲した「七新薬」の刊行でも浜口梧陵の支援を受けています。

銚子に戻ってまもなく徳島藩医に招聘されます。藩主蜂須賀斉裕は徳川家斉の22番目の子、よそ者藩主は、新参者の寛斎を重用します。斉裕没後、戊辰戦争のさなかに就任するのが次男茂韶（もちあき）です。彼は新政府側につき、寛斎は上野から会津戦まで軍陣病院頭取として治療にあたります。新政府は彼の働きを高く評価しますが、宮仕えをきらい町医者の道を選びます。30年に及ぶ町医者生活の評判は高く屋敷回りが「関の小路」と呼ばれたり、貧乏人には無料診断をしたりすることから「関大明神」と呼ばれたりしています。

維新後、寛斎の同郷の後輩で門下生の斎藤龍安は、戊辰戦争においてもその片腕となって奥羽の戦場で活躍した人です。箱館戦争の船医を終えると開拓使医官となることを決意、札幌本府に設けられた病院の第一号の医師です。この龍安からのたびたびの手紙を得て、寛斎の北海道開拓の芽はふくらみ始めたようです。4男又一は明治25／1892年に札幌農学校に入学します。寛斎はこれを機に樽川（現石狩市）に土地を取得します。徳島の縁者の片山八重蔵夫妻が来道、又一らと農場経営に臨みます。寛斎は以降2度来道しています。

又一は、十勝調査の実施後、斗満原野・上利別（現陸別）1011haの貸付許可を得て、卒業論文「十勝国牧場設計」を発表し、斗満原野での農場経営に踏み出します。土地の貸付申請は、寛斎と又一の名義で行われています。明治35／1902年4月14日、72歳の寛斎は、妻あい、3男餘作、8男の五郎らとともに北海道に向かいます。

北海道に渡った寛斎は、まず札幌区（現中央区山鼻）にある又一の自宅に寄り斗満原野に向かいます。5月、体調のすぐれない妻あいは残り3男餘作が同行します。狩勝峠の手前・落合までは鉄道を利用し、その先は徒歩です。駅逓なども含め清水泊、帯広泊（又一出迎え）、高島農場泊、利別泊、足寄泊を経て斗満に着きます。入植後、冬には札幌や東京に出むき、徳富蘆花らを訪ねています。明治天皇没後の大正元年／1912年10月15日、陸別にて82歳の生涯を閉じます。

2. 作家たちが語る関寛斎

医師で開拓者という寛斎の多彩な人生について、多くの作家たちが取り上げています。司馬遼太郎と酒井シズ（医学史家）は、医師としての活躍に焦点を当てています。徳富蘆花と城山三郎は自然との向き合いかたや先住民アイヌとの絡みも含め、開拓者としての人生に着目しています。高田郁は妻あいの視線から寛斎を語ります。

〈医師としての寛斎〉

① 司馬遼太郎「胡蝶の夢」（1979年）

この小説には、4人の医師が登場します。西洋医学の受容がどのように進んだかについて、4人の医師をとおして語られます。ポンペに学び幕府の奥医師となる松本良順に対して、徳島藩医の寛斎は新政府の軍医として従

軍します。同門の二人の皮肉な運命が浮かびます。ポンペ講義において塾頭的位置に立つ松本良順を助けるのが、語学にとびぬけた才能を見せる司馬凌海（伊之助）。彼が翻訳を手掛ける「七新薬」について、寛斎は校閲者として刊行を助けます。磯田道史は、「司馬さんは伊之助と松本良順を主人公に書こうと思ったけれど2人追加した。伊東玄朴と関寛斎です。玄朴を俗っぽい蘭学医、出世のために蘭学を使った政治屋で描きこんだ。もう一人の関寛斎は神様に近い聖人君子にした。社会性の有り・無しと俗物か君子かで医者を4つのモデルに分類して立体的に見せている。…医療とか人間に対する将来の希望を関寛斎という劇薬で終わらせたかったのでは」と読み込んでいます（第25回菜の花忌シンポジウム「週刊朝日2022MOOK」所収）。

②酒井シヅ「寛斎の医療活動」（1991年）

医学史家の酒井シヅは、寛斎の長崎留学や徳島藩医から戊辰戦争時の軍陣病院頭取へいたる足跡をとおして、「西洋医学の値打ちを庶民が本当に知った機会」を3つあげます。「1度目はジェンナー式の種痘が行われるようになった時、2度目がコレラの流行の時であり、3度目が戊辰戦争の時」です。そして、寛斎が3回ともその渦中にいたことに着目しています。（「関寛斎の医療活動」（陸別町郷土叢書「原野を拓く」所収）

③高田郁「あい　永遠に在り」（2013年）

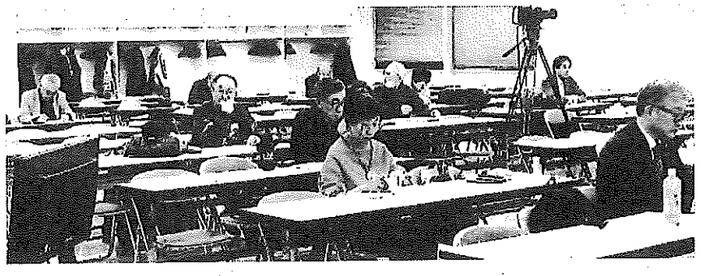
3歳の時に実母を失った寛斎は、伯母夫婦のもとで育てられ19歳の時に佐倉順天堂に学び、郷里での開業に合わせて結婚します。こうした経緯も含め妻あいの視線で語られます。浜口梧陵の支援は長崎留学、「七新薬」刊行に始まり、コレラ対策に及びます。江戸への派遣も含め多くの支援が銚子での流行阻止につながりました。津波対策の防波堤を私費で築いた浜口梧陵「稲むらの火」を引き合いに、「あいさん、あなたの夫、関寛斎は、この国の医療の堤になる人だ」「寛斎という医師が、いずれ病から人を救う堤になれる」と語らせています。

〈開拓者としての寛斎〉

④徳富蘆花「みみずのたはごと」（1913年）

寛斎が陸別に入って8年後、明治43／1910年、蘆花家族（妻と鶴子）が5泊6日をかけて陸別を体験しています。「みみずのたはごと」には当時の陸別の様子が活写されています。

森林調査隊の天幕（アイヌも含む）にまで足を運んだ一夜がとりわけ印象深い。アイヌから話を聞くくだりがあります。日本人（シャモ）への不満はとの蘆花の問いに「シャモのゴロツクがイヤだ」とのやりとり、翌日の帰途に見かけたアイヌたちについて、蘆花はこう描写します。「アツシを着、藤蔓で編んだ沓を穿き、マキリを佩いて、大股に歩いて来る。余は木陰から瞬きもせずその行進を眺めた。秋寂びた深林を背景に、何という好調和であろう。彼らアイヌは亡びゆく種族と看做されている。しかしこの森林において、彼らは正に主である。眼鏡やリボンの我らは畢竟新参の侵入者に過ぎぬ。余はことに彼ヤイコクが5束もある髭髯（しゅぜん）茫々として胸に垂れ、



素戔嗚尊を見る様な尺ゆたかな堂々雄偉の骨格と悲壮沈鬱なその眼差しを熟視した時、優勝者と名のある掠奪者が大なる敗者に対して感ずる一種の恐怖を感ぜざるを得なかった」と結びます。

もう一点、翌日に訪ねた模範農夫の宮崎君を、「もともと一文無しで渡道し、関家に奉公しているうち貯蓄した40圓を資本とし、拓き分けの約束で数年前にこの原野を開墾しはじめ、いまは10町歩を拓いている」と紹介しています。大農場経営を志向する又一と、自作農育成の間で葛藤を続けている関農場の一端がのぞかれます。

⑤城山三郎「人生 余熱あり」（1989年）

「人生 余熱あり」の刊行は、バブル景気の真っ只中にあります。定年後の人生を生活費の安い海外でのんびりといった記事がよく見られたものです。城山三郎は、そうしたサラリーマンたちが技術や経験を活かしてアフリカや中国などで余熱を燃やしているさまを活写しています。その延長線上に関寛斎が描かれますが、トーンが一段上がります。いわゆるシルバーボランティアとかの範疇に収まりきらない、「完全燃焼したい」寛斎像をあぶりだしているのです。

「寛斎は、義父の俊輔から世のため人のためになるようにとの教育を受けて育った。恩人浜口梧陵もそれを実践した人物であった。その梧陵に十分応えたと言えるのかと自問するところがあったうえ、はるかなニューヨークでの梧陵の客死もまた、寛斎をより発奮させることになったのであろう。（中略）身体健康かつ僅少ながら養老費の貯えあり。これを保有して空しく楽隠居たる生活をし、以って安逸を得て死を待つは、是人たるの本分足らざるを悟ることあり（中略）生産力の乏しきと国庫の空なるとは、世評の最も唱ふるところたり。依って、我ら夫婦は北海道における最も僻遠なる未開地に向かふて我らの老躯と養老費とを以って、我が国の生産力を増加するの事に当たらば、国恩の萬々分の一をも報じ、かつ亡父母の素願あるを貫き、霊位を慰することになろう」と結びます。

3．さまざまな移住から見える北海道開拓の諸相

寛斎が陸別に入った明治35／1902年は、すでに未開地開拓としては最後の時期に当たります。藩主を含む主従一体の開拓から始まって、屯田兵の入植、会社組織による開拓、そして国有未開地処分法のもと旧藩主や富豪による大農場経営へとつながります。寛斎は、十勝・釧路と北見の境界域にある未開地に、大いなる魅力を感じて入っています。こうした寛斎像を念頭にすると、どんな北海道が、どんな開拓像が浮かび上がるのか考えてみます。

明治維新直後の明治2／1869年、戊辰戦争の敗者、仙台藩の亘理伊達家は伊達邦成主従が北海道有珠へ新天地を求めての移住を決めます。明治3／1870年から明治14／1881年まで9次に及ぶ集団移住で2、700人が移っています。藩主らに大地積の土地を渡し、これに対する支配権を与えて開墾をする、封建制度の枠組みを残しての開拓です。ただし、交通網が未整備でインフラが整ってない中で開拓は困難を極めていました。後の旧藩主や富豪による大農場経営と形の上では似ています。

伊豆の豪農の次男依田勉三は、地元の塾から英語塾、慶應義塾を経て、明治14／1881年に渡道、釧路国・十勝国・日高国を視察して帰郷します。翌年に鈴木銃太郎や渡辺勝ら塾仲間と晩成社を設立します。その翌年に開拓地貸付を申請、明治16／1883年に14戸28人が入地して開拓が始まります。

豚の餌にと馬鈴薯を煮ていた時、自分たちの分も一緒に炊いたのを「落ちぶれた極度に豚とひとつ鍋」と詠んだ鈴木銃太郎の川柳を、「開墾のはじめは豚とひとつ鍋」と詠みなおしたのが依田勉三です。この言い換えには、開墾のはじめの辛酸を甘受し、むしろ希望の心境を託したものとも評されます。なにより、勉三は、畑作であれ畜産であれ製粉業であれでん粉製造業であれ酪農であれ稲作であれ、家畜と殺業であれバター製造であれ、あるいは製材工場の経営であれ、農業に農産加工業に、林業に林産業に、漁業に水産加工業に、ついには炭鉱採鉱業にいたるまで、晩成社にいささかなりとも有益だと予想される事業を見つけると、ためらうことなく実施に試みなければすまなかった人、希望の火を燃やし続けた人だったのです。いっさいは十勝の適地適産を発見し、確定するための貴重かつ壮大な実験につなげようとしたのでした。そんな晩成社を寛斎が訪ねた記録も残っています（浅田英祺「依田勉三の挑戦」「北のいぶき」第5号1987年）。

二宮尊徳の孫、二宮尊親をリーダーとする興復社は、募集時の移住規約に開墾成功時の土地付与、すなわち自作農育成を目標に掲げて入植者を募っています。豊頃町の二宮地区の開拓はここから始まります。関寛斎はここを何度も訪れ、自作農育成の思いを強くしています。

内陸開拓を進めるべく行われた屯田兵制度の大改革は、明治23／1890年のことです。平民主体となった屯田兵の旭川圏域への入植は、明治24／1891年からの3年間に400戸ずつですすみます。上川百万石への第一歩です。北海道全体では、明治37／1904年の廃止までに、37兵村、7337戸、39911人が入りました。家族持ちの入植でしたので人口は急増しています。当初は新しい村落の要だった兵村の周辺には、商人たちを軸に大きな市街地が急速に形成されていきます。都市化の進展に連れ兵村は次第に市街地に埋没されていきます。

対極的なのが華族組合雨竜農場です。ここでは大農場経営を計画し欧米式の農機具を導入したりしていますが開墾地に不適だったことや労働力不足もあって、明治26／1893年に解散しています。その後規模を縮小した蜂須賀、戸田、町村の3農場が開設され引き継いでいます。

島根藩主の松平直亮による農場開設は明治28／1895年。当初の経営は不調ですが、札幌農学校1期生の内田瀞を農場管理人に起用してから経営が軌道に乗ります。昭和12／1937年には農地解放を行っています。

明治31／1898年に有島武が貸付出願し、10年後に武郎名義になったのが有島農場です。有島武郎は、大正11／1922年、農場を全小作人たち（70戸）に「土地を全員で共有して農業を続ける」ことを条件に解放しています。ちなみに、関寛斎の4男又一は、札幌農学校同期（19期生）です。

関寛斎は、陸別で開拓を始めて10年後の10月に亡くなります。又一が引き継いだ関農場用地は2195haです。10年近く経って、又一は夢半ばで東京に引き上げます。開拓にまで至らなかった地域は、「昭和5／1930年を最終年として1930haの解放が実施されて」います。2百人近くの申し込みがあり、昭和5／1930年時点で、80戸の自作農が生まれています（陸別町郷土叢書「原野を拓く」）。

結びに代えて

なにより関寛斎の人間的魅力がみえてきます。彼の高潔さは、義父俊輔の教え、患者を平等に扱うポンペからの学び、そして公人としての浜口梧陵に依るところが大きいようで

す。農地解放を目指し平等主義を貫こうとするトルストイへの傾倒は、親交を結ぶ徳富蘆花「みみずのたはごと」からも伝わってきます。その平等主義はアイヌ差別や小作制度への批判的態度に貫かれています。

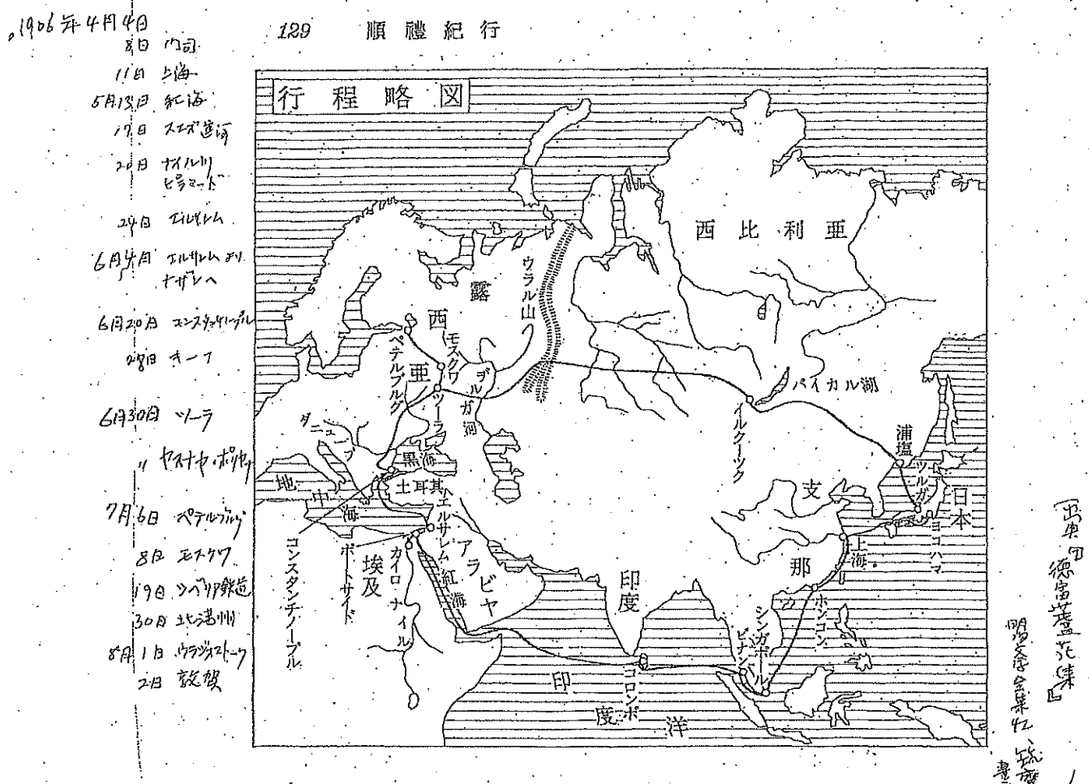
渡道へのきっかけとして、4男又一の札幌農学校入学もあります。有島武郎は同期で、松平農場の管理人に登用された内田瀞は1期生です。札幌農学校つながりという視点からも北海道開拓の一面がうかがわれます。

明治35／1902年の陸別入地は、原野を拓くという意味での北海道開拓の最終局面に当たります。陸別に軸足を置くことで見えてくるものの一つに、旧藩主や富豪による農場経営があります。狩勝峠を超えて陸別に至る道筋には今の池田町があります。町名の由来となった旧鳥取藩主池田仲博による池田農場と横浜の富豪の高島嘉右衛門による高島農場があります。寛斎が自作農育成を目指す上で何度も訪れた二宮農場もまた道筋にあります。寛斎の足跡には、晩成社以来の十勝開拓のおおよその群像が浮かび上がってきます。

狩勝峠の手前、上川盆地には屯田兵が築き上げた稲作地帯があります。札幌農学校つながりからは、松平農場管理人の内田瀞よる経営立て直しがみえます。昭和12／1937年に農地解放を行っています。

徳富蘆花の陸別訪問は、鉄道開通を機に実現しています。交通網の整備は、多大な人口流入をもたらします。蘆花「みみずのたはごと」には鉄道開通を見越した新たな市街地形成の動きが描写されています。すでに旭川地域の市街地形成において、鉄道開通は大きな役割を果たしています。

関寛斎という人物に光を当て考えることで、北海道史の多様な歩み、入植した多様な登場人物・組織等々、多様な地域の帰趨等々が繋がって見えてきました。関寛斎という人物にはそれだけの大きさがあり、その足跡から通説には見られない個性的な北海道史みたいなものが浮かび上がってきます。



『東京』徳富蘆花集
明治文学全集 42 筑摩書房

『トルストイ 十二文豪叢書 10』民友社 1897 年
『青山白雲』民友社 1898 年
『不如帰』民友社 1900 年（『国民新聞』1898-1899 年）
『自然と人生』民友社 1900 年
『探偵異聞』民友社 1900 年（匿名で出版）
『ゴルドン将軍伝』警醒社 1901 年
『思出の記』民友社 1901 年（『国民新聞』1900 年 3 月 23 日-1901 年 3 月 21 日）
『青蘆集』民友社 1902 年
『黒潮 第一篇』自費出版 1903 年
『順礼紀行』警醒社 1906 年
『寄生木』警醒社 1909 年
『みゝずのたはこと』1913 年
『黒い目と茶色の目』新橋堂 1914 年
『死の蔭に』大江書房 1917 年
『新春』福永書店 1918 年
『日本から日本へ』（全 2 巻）金尾文淵堂 1921 年（妻愛子と共著）
『竹崎順子』福永書店 1923 年（伯母の伝記）
『太平洋を中にして』文化生活研究会 1924 年（内村鑑三らと共著）
『富士』（全 4 巻）福永書店 1925-28 年（妻愛子と共著）
『蘆花日記』（全 7 巻）筑摩書房 1985-86 年（大正初期の日記新版）

徳富健次郎『みずのたはこと』（岩波文庫、1931年）

過去帳から

関　寛翁

（九月二十七日から九月二十八日抜粋）

九月二十七日。美晴。

今日は斗満の上流ニオトマムに林学士の天幕を訪う日である。朝の七時関翁、余等夫妻、草鞋ばきで出掛ける。鶴子は新之助君が負ってくれる。貢君は余等の毛布や、関翁から天幕へみやげ物の南瓜、真桑瓜、玉蜀黍、甘藍なぞを駄馬に積み、其上に打乗って先発する。仔馬がヒョコ〳〵ついて行く。又一君も馬匹を見がてら阪の上まで送って来た。

阪を上り果てゝ、囲いのトゲ付鉄線を潜り、放牧場を西へ西へと歩む。赭い牛や黒馬が、親子友だち三々伍々、群れ離れ寝たり起きたり自在に遊んで居る。此処はアイヌ語でニケウルルバクシナイと云うそうだ。平坦な高原の意。やゝ黄ばんだ楢、槲の大木が処々に立つ外は、打開いた一面の高原霜早くして草皆枯れ、彼方此方に矮い叢をなす萩はすがれて、馬の食い残した萩の実が触るとから〳〵音を立てる。此萩の花ざかりに駒の悠遊する画趣が想われ、こんな所に生活する彼等が羨ましくなった。そこで余等も馬に劣らじと鼻孔を開いて初秋高原清爽の気を存分に吸いつゝ、或は関翁と打語らい、或は黙して四辺の景色を眺めつゝ行く。南の方は軍馬補充部の山又山狐色の波をうち、北は斗満の谷一帯木々の色すでに六分の秋を染めて居る。ふりかえって東を見れば、澁別谷を劃るエンベツの山々を踏まえて、釧路の雄阿寒、雌阿寒が、一は筍のよう、他は菅笠のような容をして濃碧の色くっきりと秋空に聳えて居る。やゝ行って、倒れた楢の大木に腰うちかけ、一休してまた行く。高原漸く蹙って、北の片岨には雑木にまじって山桜の紅葉したのが見える。桜花見にはいつも此処へ来る、と関翁語る。

やがて放牧場の西端に来た。直ぐ眼下に白樺の簇立する谷がある。小さな人家一つ二つ。煙が立って居る。それからずっと西の方は、斗満上流の奥深く針葉樹を語る印度藍色の山又山重なり重なって、秋の朝日に菫色の微笑を浮べて居る。余等はやゝ久しく恍惚として眺め入った。あゝ彼の奥にこそ玉の如き斗満の水源はあるのだ。「うき事に久しく耐ふる人あらば、共に眺めんキトウスの月」と関翁の歌うた其キトウスの山は、彼奥にあるのだ。而して関翁の夢魂常に遊ぶキトウス山の西、石狩岳十勝岳の東、北海道の真中に当る方数十里の大無人境は、其奥の奥にあるのだ。翁の迦南は其処にある。創業から創業に移る理想家の翁にとって、汽車が開通した澁別なんぞは最早久恋の地では無い。其身斗満の下流に住みながら、翁の雄心はとくの昔キトウスの山を西に越えて、開闢以来人間を知らぬ原始的大寂寞境の征服に駛せて居る。共に眺めんキトウスの月、翁は久しくキトウスの月を共に眺むる人を求めて居る。若い者さえ見ると、胸中の秘をほのめかす。此日放牧場の西端に立って遙に斗満上流の山谷を望んだ時、余は翁が心絃の震えを切ないほど吾心に感じた。

鉄線を潜って放牧場を出て、谷に下りた。関牧場はこれから北へ寄るので、此れからニオトマムまでは牧場外を通るのである。善良な顔をした四十余の男と、十四五の男児と各裸馬に乗って来た。関翁が声をかける。路作りかた〳〵澁別まで買物に行くと云う。三年前入込んだ炭焼をする人そうな。やがて小さな流れに沿う熊笹葺きの家に来た。炭焼君の家である。白樺の皮を壁にした殖民地式の小屋だが、内は可なり濶くて、畳を敷き、奥に箪笥柳行李など列べてある。妻君も善い顔をして居る。囲炉裏側に腰かけて渋茶の馳走になって居ると、天幕から迎いの人夫が来た。

茶を飲みながらふと見ると、壁の貼紙に、彼岸会説教、斗満寺と書いてある。斗満寺！　此処に其様なお寺があるのか。えゝありますと云う。折りからさきに馬に乗ってた子の弟が二人、本を抱えて其お寺から帰って来たので、早速案内を頼む。白樺の林の中を五六丁行くと、所謂お寺に来た。此はまた思い切って小さな粗造な熊笹葺き、手際悪く張った壁の白樺赤樺の皮は反っくりかえって居る。関翁を先頭にどや〳〵入ると、形ばかりの床に荒莚を敷いて、汚れた莫大小のシャツ一つ着た二十四五の毬栗頭の坊さんが、ちょこなんと座って居る。後に、細君であろ、十八九の引つめに結って筒袖の娘々した婦人が居る。土間には、西洋種の瓢形南瓜や、馬鈴薯を堆く積んである。奥の壁つきには六字名号の幅をかけ、御燈明の光ちら〳〵、真鍮の金具がほのかに光って居る。妙に胸が迫って来た。紙片と鉛筆を出して姓名を請うたら、斗満大谷派説教場創立係世並信常、と書いてくれた。朝露の間は子供に書を教え、それから日々夫婦で労働して居るそうだ。御骨も折れようが御辛抱なさい、急いで立派な寺なぞ建てないで、と云って別を告げる。戸外に紫の蝦夷菊が咲いて居た。あとで聞けば、坊さんは越後者なる炭焼小屋の主人が招いたので、去年も五十円から出したそうだ。檀家一軒のお寺もゆかしいものである。

樺林を拓いて、また一軒、熊笹と玉蜀黍の稈で葺いた小舎がある。あたりには樺を伐ったり焼いたりして、黍など作ってある。関翁が大声で、「婆サン如何したかい、何故薬取りに来ない？」と怒鳴る。爺さんが出て来て挨拶する。婆さんは留守だった。十一二の男児が出て来る。翁は其肩をたゝき顔を覗き込むようにして「如何だ、関の爺を識ってるか。ウム、識ってるか」子供がにこ〳〵笑う。路は樺林をぬけて原に出る。霜枯れた草原に、野生松葉独活の実が紅玉を鏤めて居る。不図白木の鳥居が眼についた。見れば、子供が抱えて行って了いそうな小さな荒削りの祠が枯草の中に立って居る。誰が何時来て建てたのか。誰が何時来て拝むのか。西行ならばたしかに歌よむであろ。歌も句もなく原を過ぎて、崖の下、小さな流に沿うてまた一つ小屋がある。これが斗満最奥の人家で、駅逓から此処まで二里。最後の人家を過ぎてしばらく行く程に、イタヤの老樹が一株、大分紅葉した枝を、振面白くさし伸べて居る小高い丘に来た。少し早いが此処で昼食とする。人夫が蕗の葉や蓬、熊笹引かぶってイタヤの蔭に敷いてくれたので、関翁、余等夫妻、鶴子も新之助君の背から下りて、一同草の上に足投げ出し、梅干菜で握飯を食う。流れは見えぬが、斗満の川音は耳爽に、川向うに当る牧場内の雑木山は、午の日をうけて、黄に紅に緑に燃えて居る。やがてこゝを立って小さな渓流を渡る時、一同石に跪いて清水をむすぶ。

最早人気は全く絶えて、近くなる時斗満の川音を聞くばかり。鷹の羽なぞ落ちて居る。径は稀に渓流を横ぎり、多く雑木林を穿ち、時にじめ〳〵した湿地を渉る。先日来の雨で、処々に水溜が出来て居るが、天幕の人達が熊笹を敷き、丸木を渡しなぞして置いて呉れたので、大に助かる。関翁は始終一行の殿として、股引草鞋尻引からげて杖をお伴にてく〳〵やって来る。足場の悪い所なぞ、思わず見かえると、後見るな〳〵と手をふって、一本橋にも人手を仮らず、堅固に歩いて来る。斯くて四里を歩んで、午後の一時渓声響く処に鼠色の天幕が見えた。林君以下きながしのくつろいだ姿で迎える。

斗満川辺の少しばかりの平地を拓いて、天幕が大小六つ張ってある。アイヌの小屋も一つある。林林学士を統領として、属員人夫アイヌ約二十人、此春以来此処を本陣として、北見界かけ官有針葉樹林の調査をやって居るのである。別天地の小生涯、川辺に風呂、炊事場を設け、林の蔭に便所をしつらい、麻縄を張って洗濯物を乾し、少しの空地には青菜まで出来て居る。

茶の後、直ぐ川を渡って針葉樹林の生態を見に行く。濶五間程の急流に、楢の大木が倒れて自然に橋をなして居る。幹を踏み、梢を踏み、終に枝を踏む軽業、幸に関翁も妻も事なく渡った。水際の雑木林に入ると、「あゝ誰れか盗伐をやったな」と林学士が云う。胡桃が伐ってある。木の名など頻に聞きつゝ、針葉樹林に入る。此林特有の冷気がすうと身を包む。椴夷松や椴松、昔此辺の帝王であったろうと思わるゝ大木倒れて朽ち、朽ちた其木の屍から実生の若木が矗々と伸びて、若木其ものが径一尺に余るのがある。サルオガセがぶら下ったり、山葡萄が絡んだり、其自身針葉樹林の小模型とも見らるゝ、緑、褐、紫、黄、さま〳〵の蘚苔をふわりと纏うて居るのもある。其間をトマムの剰水が盆景の千松島と云った様な緑苔の塊を洄って、流るゝとはなく唯硝子を張った様に光って居る。やがて麓に来た。見上ぐれば、椴夷松椴松峯へ峰へと弥が上に立ち重なって、日の目も漏れぬ。此辺はもう関牧場の西端になっていて、林は直ちに針葉樹の大官林につゞいて居るそうだ。此永劫の薄明の一端に佇んで、果なくつゞく此深林の奥の奥を想う。林学士は斯く云うた。北見、釧路、十勝に跨る針葉樹の処女林には、アイヌを連れた技師技手すら、踏み迷うて途方に暮るゝことがある、其様な時には峰を攀じ、峰に秀ずる椴夷松椴松の百尺もある梢に猿の如く攀じ上り、展望して方向をきめるのです、と。突然銃声が響いた。唯一発――あとはまた森となる。日光恋しくなったので、ここから引返えし、林の出口でサビタの杖など伐ってもらって、天幕に帰る。

勝手元は御馳走の仕度だ。人夫が採って来た茶盆大の舞茸は、小山の如く莚に積まれて居る。やがて銃を負うてアイヌが帰って来た。腰には山鳥を五羽ぶら下げて居る。また一人川下の方から釣棹肩に帰って来た。鯇釣りに往ったのだ。やがてまた一人銃を負うて帰った。人夫が立迎えて、「何だ、唯一羽か」と云う。此も山鳥。先刻聞いた銃声の果なのであろう。火を焚く、味噌を摺る、魚鳥を料理する、男世帯の目つらを抓む勝手元の忙しさを傍目に、関翁はじめ余等一同、かわる〴〵川畔に往って風呂の馳走になる。荒削りの板を切り組んだ風呂で、今日は特に女客のある。好い気もちになって上ると、秋の日は暮れた。天幕にはつりランプがつく。外は樺の篝火が真昼の様に明るい。余等の天幕の前では、地上にかん〳〵炭火を熾して、ブツ〳〵切りにした山鳥や、尾頭つきの鯇を醤油に浸しジュウ〳〵炙っては持て来、炙っては持て来る。舞茸の味噌汁が来る。焚き立ての熱飯に、此山水の珍味を添えて、関翁以下当年五歳の鶴子まで、健啖思わず数碗を重ねる。

日はもうとっぷり暮れて、斗満の川音が高くなった。幕外は耳もきれそうな霜夜だが、帳内は火があるので汗ばむ程の温気。天幕の諸君は尚も馳走に薩摩琵琶を持出した。十勝の山奥に来て薩摩琵琶とは、思いかけぬ豪興である。弾手は林学士が部下の塩田君、鹿児島の壮士。何をと問われて、取りあえず「城山」を所望する。今日は九月二十七日、城山没落は三十三年前の再昨日であった。塩田君はやおら琵琶を抱え、眼を半眼に開いて、咳一咳。外は天幕総出で立聞く気はい。「夫れ――達人は――」声はいさゝか震えて響きはじめた。余は瞑目して耳をすます。「大隅山の狩くらにィ――真如の月の――」弾手は蕭々と歌いすゝむ。「何を怒るや怒り猪の――俄に激する数千騎」突如として山崩れ落つ鵯越の逆落し、四絃を奔る撥音急雨の如く、呀と思う間もなく身は悲壮渦中に捲きこまれた。時は涼秋九月、処は北海山中の無人境、篝火を焚く霜夜の天幕、幕の外には立聴くアイヌ、幕の内には隼人の薩摩壮士が神来の興まさに旺して、歌断ゆる時四絃続き、絃黙す時声謡い、果ては声音一斉に軒昂鳴咽して、加之始終斗満川の伴奏。手を膝に眼を閉じて聴く八十一の翁をはじめ、皆我を忘れて、「戎衣の袖をぬらし添うらん」と結びの一句低く咽んで、四絃一撥蕭然として曲終るまで、息もつかなかった。讃辞謝辞口を衝いて出る。天幕の外もさゞめいた。興未だ尽きぬので、今一つ「墨絵」の曲を所望する。終って此興趣多い一日の記念に、手帳を出して関翁以下諸君の署名を求める。

それから話聞くべくアイヌを呼んでもらう。御召につれて髭顔二つランプの光に現われ、天幕の入口に蹲踞した。若い方は、先刻山鳥五羽うって来た白手留吉、漢字で立派に名がかけて、話も自由自在なハイカラである。一人は、胡麻塩髭胸に垂るゝ魁偉なアイヌ、名は小川ヤイコク、これはあまり口が利けぬ。アイヌの信仰、葬式の事、二三風習の質問などして、最後に、日本人に不満な点はと問うたら、ヤイコクは重い口から「日本人のゴロツクがイヤだ」と吐き出す様に云った。ゴロツクは脅迫の意味そうな。乳呑子連れた女が来て居ると云うので、二人と入れ代りに来てもらう。眼に凄味があるばかり、例の刺青もして居らず、毛繻子の襟がかゝった滝縞の綿入なぞ着て居る。名もお花さんと云うそうだ。妻が少し語を交えて、何もないので紫メレンスの風呂敷をやった。

惜しい夜も更けた。手を浄めに出て見ると、樺の焚火は燃え下って、ほの白い煙を颺げ、真黒な立木の上には霜夜の星爛々と光って居る。何処かの天幕でぱっと火光がさして、黒い人影が出て来たが、直ぐ入って了った。川音が颯々と嵐の様に響く。持て来た毛布までかさねて、関翁と余等三人、川音を聞き〳〵趣深い天幕の夢を結んだ。

九月二十八日。微雨。

関翁は起きぬけに川に灌水に行かれた。

朝飯後、天幕の諸君に別れて帰路に就く。成程ニオトマムは山静に水清く、関翁が斗満を去って此処に住みたく思うて居らるゝも尤である。然し余等は無人境のホンの入口まで来たばかり、せめてキトウス山見ゆるあたりまで行かずに此まゝ帰って了うのは、甚遺憾多かった。

帰路余は少し一行に後れて、林中にサビタのステッキを伐った。足音がするのでふっと見ると、向うの径をアイヌが三人歩いて来る。真先が彼留吉、中にお花さんが甲斐〻しく子を負って、最後に彼ヤイコクがアツシを着、藤蔓で編んだ沓を穿き、マキリを佩いて、大股に歩いて来る。余は木蔭から瞬きもせず其行進を眺めた。秋寂びた深林の背景に、何と云う好調和であろう。彼等アイヌは亡び行く種族と看做されて居る。然し此森林に於て、彼等は正に主である。眼鏡やリボンの我等は畢竟新参の侵入者に過ぎぬ。余は殊に彼ヤイコクが五束もある鬚髯蓬々として胸に垂れ、素盞雄尊を見る様な六尺ゆたかな堂々雄偉の骨格と悲壮沈鬱な其眼光を熟視した時、優勝者と名のある掠奪者が大なる敗者に対して感ずる一種の恐怖を感ぜざるを得なかった。関翁が曾て云われた、山中で山葡萄などちぎると猿に対して気の毒に思う、と。本当だ。山葡萄をちぎっては猿に気の毒、コクワを採っては熊に気の毒、深林を開いてはアイヌに気の毒なのも、自然である。そこで余は思った、熊一変せばアイヌに到らん、アイヌ一変せば日本人に到らん、日本人一変せば悪魔に到らん。余はアイヌを好む。尤も熊を好む。

天幕を出る時ぽと〳〵落ちて居た雨は止み、傘を翳す程にもなかった。炭焼君の家で昼の握飯を食って、放牧場の端から二たび斗満上流の山谷を回顧し、ニケウルルパクシナイに来ると、妻は鶴子を抱いて駄馬に乗った。貢君が口綱をとって行く。後から仔馬がひょこ〳〵跟いて行く。時々道草を食って後れては、遽てゝ駈け出し追ついて母馬の横腹に頭をすりつける様にして行く。関翁と余と其あとから此さまを眺めつゝ行く。斯くて午後二時駅逓に帰った。

関翁は過日来足痛で頗行歩に悩んで居られると云うことをあとで聞いた。それに少しも其様な容子も見せず、若い者並に四里の往復は全く恐れ入った。

此夕台所で大きな甘藍を秤にかける。二貫六百目。肥料もやらず、移植もせぬのだから驚く。関翁が家の馳走で、甘藍、の漬物に五升藷(馬鈴薯)の味噌汁は特色である。斗満で食った土のものゝ内、甘藍、枝豆、玉蜀黍、馬鈴薯、南瓜、蕎麦、大根、黍の餅、何れも中々味が好い。唯真桑瓜は甘味が足らぬ。